北海道平取町の大地連携ワークショップの持続性と発展可能性

山形大学　教育開発連携支援センター
小田隆治

まえがき

2019 年 7 月に、「北海道平取町役場のＫです。」という件名のメールが私の元に届いた。懐かしいＫ氏からのメールである。要件は、北海道平取町の大地連携ワークショップの参加申込者が少ないので、大学間連携組織の「ＦＤネットワーク“つばさ”」[注1]を通して東日本全体に広報して欲しい、との依頼であった。平取町は 2013 年から毎年、大地連携ワークショップを開催してきた。

その後再びメールが来て、2020 年度から国の交付金が下りるので、大地連携ワークショプをスケールアップして全国展開していきたいので、協力して欲しいとのことであった。

大地連携ワークショップとは、そもそも何なのか。これまでどのようなことが展開されてきたのか。そしてこれから平取町で何が展開されていくのか。このことを報告する。

そもそも大地連携ワークショップとは何か

大地連携ワークショップは、2012（平成 24）年度から 2016 年度まで 5 年間の文部科学省の事業「大学間連携共同教育推進事業」に申請し、採択された我々の取組「東日本広域圏の大学間連携による 教育の質保証・向上システムの構築」の中のメインプロジェクトであった。この取組には北海道・東北・関東の大学・短大・高専からなる大学間連携組織「ＦＤネットワーク“つばさ”」に加盟している学校の中から手を挙げてくれた 19 の大学・短大と 14 の自治体等が参加した。取組は通称「つばさプロジェクト」[注2]と呼ぶことにした。私が大地連携ワークショップを含めたこの取組全体のプランを構想し申請書を書き、実施の総監督となった。

大地連携ワークショップのプロトタイプは、山形大学の「エリアキャンパスもがみ」[注3]で行っている授業「フィールドラーニング」[注4]である。2005（平成 17）年 3 月に山形県最上地域 8 市町村と山形大学との包括協定によって最上地域全体をバーチャルなキャンパスと見立てた「エリアキャンパスもがみ」が誕生した。2006 年度から「エリアキャンパスもがみ」で、山形大学 6 学部の初年次の学生を対象とした教養教育の授業「フィールドラーニング（当時はフィールドワークと呼んでいた）」を開講し、以後毎年実施し、これまでの受講生は 3,000 名を超えている。

「フィールドラーニング」とは社会性やコミュニケーション力、課題発見能力等のジェネリックスキルの育成を目的とした現地体験宿泊型の教養教育の授業である。講師は地元の人たちが担当している。

大地連携ワークショップは「エリアキャンパスもがみ」の「フィールドラーニング」の発展型かつ拡大型である。「エリアキャンパスもがみ」の「フィールドラーニング」においても、山形県内の他大学の学生が受講することはかつてあったが、それは稀であった。大地連携ワークショップは、北海道から関東までの大学の学生が参加することを前提とした。これが「エリアキャンパスもがみ」とは違う一点目である。二点目は、遠隔地の複数の大学の参加により、「エリアキャンパスもがみ」の「フィールドラーニング」のように土・日曜日を利用することはできないので、夏季休業中に連続 4 日間を設定することにしたことである。両者にこの 2 点以外にそれほど違った点はない。

大地連携ワークショップは、北海道の①釧路市阿寒湖周辺、②平取町、山形県の③金山町、④戸沢村、神奈川県の⑤川崎市、⑥相模原市の 6 ケ所で実施した。

最初の年に山形大学が担当して山形県金山町でパイロット版を実施し、複数の大学から学生が参加し、同時に大地連携ワークショップの研修のために他大学の教職員が参加した。翌年から、①は北翔大学、②は札幌大学、④は山形大学、⑤は日本女子大学、⑥は東京家政学院大学が担当して計画を練り実施していった。

大地連携ワークショップは海外版として、山形大学が担当して⑦米国ニューヨーク、⑧韓国ソウルで実施した。

以上のように、2013 年から 2016 年までの 4 年間に大地連携ワークショップは活発に行われ、事業期間が終了してからもそれぞれの大学独自で、地域との連携授業や事業が展開されるようになった。これが本事業の成果である。だが事業終了後、たった一つの例外を除いては、複数の大学の学生が集まって行う大地連携ワークショップが開講されることはなかった。この唯一の例外が、北海道の平取町である。平取町は事業終了後も毎年町単独で大地連携ワークショップを実施してきたのである。

平取町の大地連携ワークショップの歴史

「つばさプロジェクト」の申請書を書く際に、申請の必要条件として連携機関を探さなければならなかった。山形県は最上 8 市町村にお願いしたが、北海道は“つばさ”加盟校の札幌大学にお願いした。これを担当することになった教員がアイヌ文化の研究者であり、研究のフィールドとしていたのが釧路市阿寒町と沙流郡平取町であった。

偶然この教員が札幌で平取町の役場の方と会う機会があり、そこで我々の取組を説明すると役場の人はすぐに連携機関に名乗りを上げてきたという。この役場の人こそが冒頭のＫ氏であった。こうして平取町はつばさプロジェクトの連携機関の一つになった。余談だが、平取町と書いて「びらとりちょう」と読むのだが、当初パソコンで「ひらとりちょう」と入力したが、もちろん「平取町」の漢字は出てこなかった。

2012 年 9 月につばさプロジェクトの採択の一報が入り、我々はすぐに連携機関である自治体にあいさつに赴いた。初めてＫ氏と会ったのは平取町役場であった。平取町

は町長以下全員フレンドリーに我々を迎えてくれ、プロジェクトに積極的に取り組もうとする意志をうかがわせてくれた。

2012 年 10 月末に つばさプロジェクトの 19 の連携校と 14 の連携機関からなる第一回目の協議会を山形市で開催したが、協議会に先立ってＫ氏から電話が入り、協議会の前に私に会って直接二人だけで話がしたいという依頼があり、会うことにした。私の研究室で、大地連携ワークショップを平取町では札幌大学が担当し、2014 年と 2015 年の 2 度開催する予定であることなどを説明した。Ｋ氏はその他の年にプロジェクトとは別に平取町単独で大地連携ワークショップを開催できないかと提案してきた。すでに町で財源を確保しているというのである。すさまじい熱意に気おされするほどであった。我々のプロジェクトでは学生の旅費や滞在費をプロジェクトから捻出するので、参加学生を集めることは難しくないが、旅費や滞在費を学生の自己負担にすると学生を集めるのは難しいだろう、と説明した。いずれにしても、協議会とその後の情報交換会に参加する連携校の教職員に個別に当たってみてはどうだろうかと提案した。二人の話し合いは 3 時間に及んだ。

Ｋ氏は情報交換会でいろいろな人たちに平取町のプランを説明していった。アルコールの入った情報交換会でこの熱心な営業活動は異色であった。驚くべきことに営業活動はすぐに実を結んだ。東京造形大学の先生が来年の夏に学生をつれて平取町の大地連携ワークショップに参加することが決定したのだ。そして翌年学生 6 名と教員 1 名が参加して実施された。平取町で開催された第一回目の「大地連携ワークショップ」は平取町主催のものであり、大学が主導するものでなかったことは特筆に値する。平取町は役場と地域住民によってプログラムを組み実施に移し成功したのだ。成功と言えるのは、東京造形大学の参加した学生や引率した教員の満足度が高かったことと、役場の担当者と講師になった地域住民も手ごたえを感じたからであった。これが以後毎年実施する基盤となった。

ところが、つばさプロジェクトで大地連携ワークショップを実施するときには、Ｋ氏は役場の中で配置替えとなり、我々のプロジェクトとはまるで関係のない部署に所属することとなった。だが、Ｋ氏の後を継いだ人たちも札幌大学との連携のもとに熱心に大地連携ワークショップを行っていった。さらにつばさプロジェクトが終了後も、Ｋ氏抜きで大地連携ワークショップを毎年実施していったのだ。つまり、Ｋ氏が火をつけてそれを他の人たちがずっと火を絶やさずに守ってきたのである。

平取町の大地連携ワークショップの特徴

平取町の大地連携ワークショップの特徴はアイヌ文化にある。平取町には住民のおよそ 20％がアイヌの人であり、平取町内の二風谷（にぶたに）という地域には、伝統的なアイヌの住居も建っている。北海道の中でもアイヌ文化保存の拠点となっている。町はアイヌ文化の普及や継承に積極的であり、様々な事業を展開してきたが、大地連

携ワークショップをそのための新たなツールとして位置付けたのである。

当初、私が平取町に大地連携ワークショップを説明する際には、アイヌ文化に限定せずに町の特産品のトマトの栽培など、自然や産業など様々なアプローチができると述べたが、実施の際にはアイヌ文化に収斂された。これは町役場の大地連携ワークショップを担当する部署がアイヌ文化担当部署であることとも深く関連している。「エリアキャンパスもがみ」の担当部局が教育委員会なのとは、必然的に違う様相になった。

大地連携ワークショップは 3 泊 4 日で開催され、タイトルは「北海道でアイヌ文化体験！」である。目的は「アイヌの人たちが、北海道の厳しい自然の中を生き抜いてきた知恵、独特な文様に込められた意味を学び、現代社会を生き抜くヒントを得る」である。場所は「平取町二風谷アイヌ文化情報センター、チセほか」であり、講師は「二風谷民芸組合員、公益財団法人アイヌ民族文化財団登録アドバイザー、学芸員ほか」があたった。参加対象は大学生で、定員は 15 名であった。

“つばさ”プロジェクトで実施した 2014 年と 2016 年の回には、それぞれ大学生が 15 名ずつ参加し、教職員も 16 名と 9 名がサポートに入った。このようにきっちりと定員は確保された。

町単独の大地連携ワークショップでは 10 名の学生定員に対して、2015 年が３大学 11 名の学生（北海道大学１名、山形大学４名、立命館大学６名）と立命館大学の職員が２名参加した。この年は、6 月になってもまったく学生が集まらないので私のところに電話があり、私の授業で紹介して山形大学から 4 名が集まり、懇意にしている立命館大学の職員に連絡して 6 名が、北海道大学においても私の知っている学生に直接声をかけて 1 名が集まった。綱渡りの人集めであった。2017 年は 3 大学（北海道大学、山形大学、中央大学）から合計 3 名と少ない参加者であった。

2018 年は 5 大学（北海道大学、帯広畜産大学、青森中央学院大学、山形大学、千葉大学大学院）から 5 名が、これに加えて 5 名の社会人の参加者があった。2019 年には 3 大学（北海道大学 2 名、千葉大学大学院 2 名、慶應義塾大学 1 名）から 5 名と社会人 1 名の参加があった。

2017 年の 3 名という存続の危機を迎える人数であったが、翌年からは社会人の参加や大学院生の参加、いわゆる高偏差値の大学などの学生の参加、と新たな展開を見せている。大学院の専門性の高い学生の参加や、高偏差値の学生の参加などによって、学生と講師の双方向性は高まり、本ワークショップの質が向上していく可能性を秘めている。

平取町の大地連携ワークショップの新たな可能性

平取町の大地連携ワークショップは、当初の予想通り、学生の確保に苦戦している。2020 年からは補助金によって参加費をただにすることができるが、このことだけで学

生確保ができるわけではない。今の大学生は、興味関心が多岐にわたり、タダだから参加するわけではないのだ。しかし、15 名程度の学生ならば広報活動を早くからしっかりやればそれほど難しい人数ではないだろう。近年のアイヌ文化に興味を寄せる大学院生や学部生の参加を見ると、かれらの所属する研究室にチラシを送るなどすれば継続した参加が望めるのかもしれない。

2020 年の大地連携ワークショップは、これまでの 3 泊 4 日を拡大し、7 泊 8 日となり、内容の充実が求められている。定員も 10 名から 15 名と増えるが、これは“つばさ”プロジェクトの際の人数と違いはないので、現地の人たちも慣れていることだろう。

近年の動向を見ると、社会人を対象とした大地連携ワークショップを組んでもいい段階に入っているのかもしれないと思わせる。ニーズはありそうなのだ。さらには、アイヌ文化を普及したいのならば、小学生、中学生、高校生のワークショップを組むことも必要なのではなかろうか。修学旅行として組むこともできるだろう。底辺を拡大することによって、大学生版の大地連携ワークショップへリカレントするかもしれない。さらに、外国人留学生のための大地連携ワークショップを開催しても面白いかもしれない。かれらがアイヌ文化についてどのように考え、かれらの国の少数民族や先住民族について平取町の人たちに教えてくれるかもしれない。ここに新しい展開が生まれてくる可能性がある。

大地連携ワークショップの修了生には、修了証書を授与することも考えてみてはどうだろうか。アイヌ検定などと合わせて、ワークショップには初級、中級、上級のグレードをつけてもいいのかもしれない。

おわりに

町主導の大地連携ワークショップは、大学主導の大地連携ワークショップとはどこかが違うのだろう。大学の利益よりも町の利益が優先されるのだ。だが、いずれにしても受講者である大学生が一番の受益者でなければ、大地連携ワークショップを継続することはできない。大地連携ワークショップを発展させるためには、学生と講師との相互作用が必須である。体験型と言いながら、学生が地元講師とどれだけ深く話すことができるか、それによって大地連携ワークショップの真価が問われる。

いずれにしても、平取町には大地連携ワークショップを発展させようとする熱い担当者がたくさんいる。これがこれまでと同様、未来の大地連携ワークショップの鍵を握っていると言える。大地連携ワークショップは、平取町のアイヌ文化を普及するための一つのツールと捉えられているのかもしれないが、体験型であることと大学生を対象とする点に新しいツールとしての無限の可能性を担当者は見出したのであろう。私は鋭い感覚だったと思う。

私は 2020 年度から平取町の大地連携ワークショップの協議会の座長に就くことに

なっている。私の直感では、私が考えていること以上のことが平取町で展開されそうである。私は楽しみながらサポートしていきたいと考えている。

注１　大学間連携組織「FDネットワーク“つばさ”」については、Webサイト（http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/tsubasa/index.html、2020年2月26日現在）を参照のこと。

注２　取組「東日本広域の大学間連携による教育の質保証・向上システムの構築」通称「“つばさ”プロジェクト」はWebサイト（http://www.yamagata-u.ac.jp/gp/tsubasa-p2012/、2020年2月26日現在）を参照のこと。「大地連携ワークショップ」については、2013年以降毎年年度末に発行している『“つばさ”プロジェクト報告書』を参照のこと。

注３　「エリアキャンパスもがみ」の設立経緯については、小田隆治著『大学職員の力を引き出すスタッフ･ディベロップメント』2010、ナカニシヤ出版を参照のこと。「エリアキャンパスもがみ」の活動については、Webサイト（http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/、2020年2月26日現在）を参照のこと。

注４　「フィールド・ラーニング」については、小田隆治・呉屋淳子・橋爪孝夫著「フィールドラーニングは教養教育の新しい教育方法である」山形大学高等教育研究年報8，38－43、2016を参照のこと。「フィールドワーク：共生の森もがみ」については、小田隆治・杉原真晃・酒井俊典著「地域の人たちと交流する現地体験宿泊型授業―山形大学「エリアキャンパスもがみ」の試み」第60回東北・北海道地区大学一般教育研究会　研究収録：75～78頁、2011を参照のこと。